

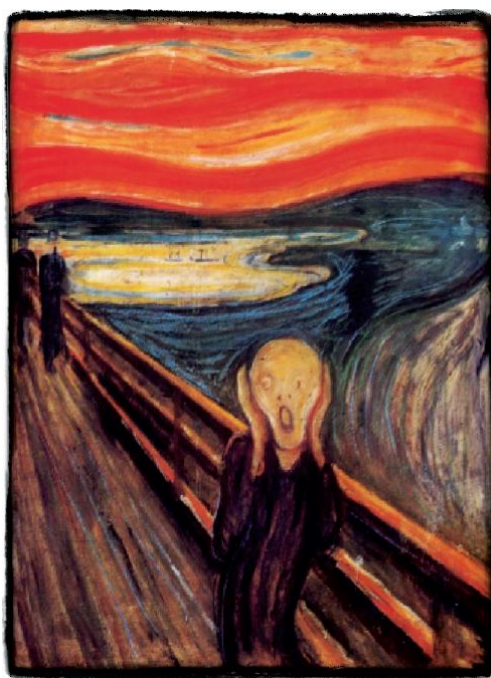
幸せな贈り物

解放

悪夢と 金縛り

ブルース・リー家系の呪い？

はたして、ブルース・リー（李 小龍、リー・シャオロン）は家系に伝わる呪いによって死んだのでしょうか。1940年11月27日に生まれ、1973年7月20日に死んだブルース・リーは、幼いころから先天的に金縛りにあう体質で、うなされる時ごとに黒い影のような変なかたちを見たと言っていました。18歳になった年に金縛りにあった彼は、はじめて影のような金縛りの悪霊が「おまえの父は64歳で死んで、おまえは彼の半分も生きられない」と話す呪いの声を聞いておびえました。ブルース・リーはその時から悪霊から自分のからだを守るために武術を学び始めました。それから何年か後、香港の有名な風水



専門家の助言のとおり金縛りの悪霊から抜け出すためにアメリカに移民して行ったのですが、ブルース・リーはアメリカでも金縛りにずっと押さえられて恐怖に震えていました。毎夜ブルース・リーは自分を訪ねてくる黒い影の悪霊のために、よく眠れずアメリカに移住して何年か後、彼の父は悪霊の呪いのおとこり64歳で亡くなりました。1973年<燃えよドラゴン>を撮影していた途中で、突然、黒い影の悪霊に襲われて倒れました。これを目撃した撮影記者たちは、ブルース・リーが落ちたメガネを拾うふりをする奇怪な状況を演出したという証言をしまし

た。その後、ブルース・リーは<死亡遊戯>を撮影しているときに33歳で死亡したのですが、死ぬ前、自分の呪いが息子に続かないように多額のお金を使って風水の占い師の助言を求めました。しかし、彼の息子もやはり1995年父ブルース・リーを追慕する映画の封切りを控えて映画<クロウ - 飛翔伝説>を撮影していたときに銃器事故で悲劇的な死を迎えました。息子のブランドンの死を見守った周囲の人々は、ブルース・リー家の呪いが実際に存在するようだと話しました。ブルース・リーの親兄弟は離婚したり、死亡していて、このような状況が呪いにより繰り返されていると信じている家族は、呪いが自分のおじいさんの墓

からきたと主張をしています。1929年12歳の年齢で死んだ香港の風水の神童と言われたソン・リンルのそばに埋められたブルース・リーのおじいさんは、自分が死ぬ前「神童が夢に現れて、あなたが私のそばに埋められれば、あなたの家をそっとしておかない」という話をしたことが知られています。はたして、ブルース・リーの家は香港最高の明堂に埋められた彼のおじいさんの墓地のせいで大きい栄華を味わったのにそばに埋められた神童の呪いによって、めちゃくちゃになってしまったのでしょうか。

ある若者がある日の夜、塾での夜の勉強を終えて疲れた頭も冷ますのをかねて、友人たちといっしょに深夜映画を見に行ったのですが、その内容は、正常な主人公が眠ればかならず夢遊病患者になって歩き回り、ぞっとするように人を殺す猟奇的な恐怖映画でした。ほんとうにその場に凍りつくほど怖い内容だったのですが、他の友人たちのように無視することにして、帰って少しの間、眠ったと言いました。ところが、問題はそこからでした。その深夜映画を見た後から、ひょっとして自分自身も知らない間に夢遊病患者になって映画の中の主人公のように夜中に人を殺して回ることはないだろうかと思う恐怖心と、悪夢に対する恐れのために、夜になると夜ごと寝ることができなくて、からだを壊す状況になったということです。いっそ死んでしまうほうが楽だという考えがその青年の頭の中を支配して、さらに苦しいと言いました。

悪夢と金縛りからの解放

人間は一晚に一時間半を夢を見て、一生の間、なんと4年を夢の中で過ごすと言われていています。そのうち老若男女、だれでも経験するようになる悪夢は、特に3~5歳乳児の10~50%、成人の50%が経験します。追跡、攻撃、落下、試験失敗、悪霊、家族の死、抜歯、脱毛、逃亡、戦争など身体的威嚇と損傷の内容が多いのですが、おもにストレス、衝撃、大きい事件の後遺症、不安、ゆううつ、心配、罪悪感など情緒的な部分が悪夢の原因になります。不安や恐怖がともなった悪夢の体験は、記憶から簡単に消すことができません。

それなら繰り返して悪夢を見る人々はどうでしょうか。夢の中でもがけば実際にありったけの力をふりしぼるようになるから、胸の痛みにつながって、こういう日が繰り返すと、最後には目をとじるのが怖くなり始めます。昼間に活動したからだの器官と意識の世界を休ませる時間でなく、悪夢を見れば、むしろ忙しく活動する昼間と違うところがありません。結局、悪夢の頻度が高まるほど、ゆううつと不安症状、分裂型性格障害、ストレス性の生活での事件が現れて、現実の人生まで障害を体験するようになります。ところで、悪夢を見て不安障害が生じるのではなく、すでに根をおろした不安障害のために悪夢を見るというのが事実です。

それでは、このような情緒不安の障害はなぜ始まり、どのように、ここから自由になることができるのでしょうか。神様のかたちとして造られた人間が神様を離れた直後、まず最初に訪ねてきた感情は「恐れ」でした。サタンの誘惑によって訪ねてきた罪によって神様と離れた人間は、両親を失った孤児のように、悪夢のような人生を生きるようになりました。人間だけが霊的存在ですから、目に見えない病気になった心とたましいを回復しようと、絶え間ない努力をしています。「悪夢よけのお守り」がいちばん人氣があったり、悪夢を主題にしたスリルあふれる小説が日本全域で悪夢熱風を起こしたりもしました。

しかし、目に見える方法では、あなたの無意識と潜在意識に深く根をおろした不安と恐れの本問題を絶対に解決することはできません。それで、神様は人間が解決できない問題を解決してくださるために「キリスト」を約束してくださったのです。キリストは、この世に來られて十字架で死んで復活されることによって、神様を離れたすべての人間が神様に会える道を開いてくださいました(ヨハネの福音書14:6)。キリストは、十字架で私たちの罪の代わりに死なれることによって、私たちのすべての罪を解決して、呪いと災いから解放させてくださいました(マルコの福音書10:45、ローマ人への手紙8:2)。キリストは死から復活され、今でも人間を困らせて地獄に引っ張っていくサタン(悪魔)のすべての権威を完全に打ちこわされました(ヨハネの手紙第一 3:8)。キリストは、人間の運命と呪いの問題を完全に解決されました。その「キリスト(Christ)」がまさに「イエス(Jesus)」です。今、キリストであるイエス様を信じて心に受け入れることによって、神様の子どもになって、すべての運命と悪夢から解放されます。今夜から「イエス・キリストの御名」を引続き呼んでみてください。悪夢と金縛りをもたらずサタン(悪霊)の働きはあなたから離れるでしょう。

幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と言った。すると即座に、霊は出て行った。(使徒の働き 16:18)

どんなにがんばってもだめなこと

小さいころは、お金がたくさんある金持ちになれば、本当に幸せになるという考えを時々していました。小さいころは、幸せの基準が肉体的で、世的なものがすべてであるようで、お金をたくさんもうけて成功すれば、みな幸せだと思っていました。また、福音をよく知らずに、なんとなく信仰生活をする時には、神様以外にも幸せがたくさんあるようでした。しかし、神様に会って福音を知るようになって、考えが変わるようになりました。

神様に会うことができない人間は、どんなものを持って味わっても、まことの幸せはないということです。瞬間的な快樂や満足感、平安はしばらく少しの間はあるかもしれませんが、永遠なまことの幸せ、まことの安らぎ、まことの喜びは、神様を知って、神様に会う時にだけ与えられるのです。本当に一生使ってもみな使えないお金を持っているのに、どこに出しても他の人をうらやましく思うことがない名誉と権力を持っているのに、最高の学閥で途方もない知識を持っていて、みんながうらやましがらる美貌と健康を持っているのに、その人自身は幸せがなくてさまよいながら苦しんでいるという人々をたくさん見ました。そうではないように、問題がないように、幸せなように、みんなもっともらしく包装をしているからであって、事実、その内面は他の人々に話せないいろいろな苦しみに崩れていきつつあるのです。赤ん坊のとき、あるいは小さいときに、海外に養子になっていった子どもが成人して、自分を捨てた祖国と親に対して恨みながらも懐かしくて、故国を探す姿を見ると、仕方ない本能的な部分ではないかと思うようになります。

私たちの人間は肉体的なものだけでは生きられない霊的な存在で、神様に会ってこそまことの幸せになる、そのような存在です。それで、神様を離れて願ってもいけない罪と呪いと苦しみの中で、サタンに縛られている私たちの人間を救ってくださるためにイエス様が来られたのであり、その方は聖書に預言されたとおり、女の子孫として来られて、十字架で死なれて私たちの人生のすべての問題を完全に解決されたのです。そして、だれでもこの事実を信じて、その方を主人として受け入れるようになれば、神様の子どもになって、救われるので、まことの幸せを味わうようになっています。まるで子どもが家を出て苦労して自分の家に帰ってきて休む時に感じる平安のように、道に迷って泣いていた子どもが母親を見つけて、そのふところに抱かれるときに持つ安堵感のように、そのような根源的な幸せです。イエス様はキリストです。まことの王として来られて、サタンのすべての権威を打ちこわされ、まことの預言者として来られて、神様に会う道を開いてくださり、まことの祭司であるため、私たちのすべての罪の問題を解決してくださいました。このキリストを私のキリストとして、私の主人として信じて受け入れるとき、そのように抜け出たかった運命が変わるようになって、世の中のなにによっても得ることができなかったまことの幸せが始まるようになるのです。

この驚くべき救いの祝福の中に今、みなさまを招待いたします。

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。

私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。

しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。

イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。

どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。

そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかさされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



道を探すあなた



イラスト_シン・チョウンウン

ある牧師が訪問に行くときに道に迷った。分かりそうな道なのだが、左右が分からなくなって道を行く少年に方向を尋ねた。少年は親切に来た道と行かなければならない所がどこかを知らせてくれた。親切に案内してもらった牧師が、とてもありがたい感謝すると話しながら、今日の伝道を実践する心で、今日、私があなたに天国に行く道を知らせたいがよいかと言ったところ、その少年はにっこり笑いながら「いや、町内の道もご存知ないのに、天国に行く道はどのように分かるのですか」と言いながら、自分はおそこ見える礼拝堂に通っていると言いながら、無事に行ってくださいと言って走って行ったそうだ。このごろは、旅行が特別な経験でなく、単純な生活の延長であり、現場学習の日課に変わった。そうするうちに、多様な道案内の方法が開発されて、活用度を高める方法が現れ、生活の便利さが増している。はじめてカーナビが出てきたときは、比較的高価な品なので、運転が終わった後にはそれはずして別に保管したりもしたが、今はほとんどの車両に着いていたり、個人が所有しているので、そのように特別にはしない。その便利さが今はスマートフォンを通して、個人のナビゲーションとして座を占めて、道を探すときも道を聞かなくてもよくなっているのだが、それによって、人との関係で生まれる人間味もともになくなるようで、便利さがさらに不便に思われる。さらに少し発展した現実インターネットを通して地域の地図のサービスや映像資料を通して周辺の状況を生き生きと伝えて案内してもらうこともできる。それで、まるで生中継するように道案内できる時代が開かれたのだ。

このように便利な時代になったが、人々は本当に自分の道をよく知って行っているのか気になる。現実的な生活での建物などに関する道は案内してもらえるが、人間はたましいと肉体を持った特別な存在なのに、たましいの道はどのように案内してもらえるのかということだ。これは確実に導かれることがとても難しい。なぜなら、簡単に宗教がその案内の

方法だと感じるのだが、宗教が肉体の人生は案内しても、たましいを認めない構造的な本質を持っているので、その価値を見せてくれというのは大変な要求だ。歴史的に地球上に出現して、自分の一生を燃やして人間にまことの道を提示して案内しようとした数多くの聖人と偉人は、まことに道であり光であったか、私たちはたましいの価値を通して確認してみなければならない。自分がだれであり、どこからきて、なぜ生きて、どこへ行くのか知らないままで人生を消費したら、それは知っている道で道を見つけれないでさまようようだ。アメリカから帰ってくるときに、北太平洋を横切りながら目には見えない夜の海を通り過ぎられるのは、自動航法装置を利用するためであるが、そのように暗い夜空の道を気兼ねなく飛んでいる巨大なジャンボ飛行機の中で、人生の道の航法装置はないのかを考えてみる。

すべての宗教は道を案内する良いことであるが、福音は道そのものだ。道を探す人は道が恐ろしいが、その道がまさしく私の終着点になったら、確実に味わうことになるのだ。道が与えられたことは、探せということではなく、道を味わえということだ。道案内する資料は多いが道はより見つけられないから、道であるキリストを見上げることが、より一層、価値あるように感じつつ旅をしている。

チョン・ヒョングク牧師(福音コラムニスト)

* 相談したい方はこちらまでどうぞ